

寄稿

# 非暴力と慈悲

龍谷大学教授  
人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター長  
鍋島直樹



## 被爆者の死生観と願い

ひとしずくの雨が湖面に落ちると、波紋が静かにひろがるように、真実の言葉は、人々の心に響きわたる。被爆者の証言は、深い悲しみから生まれた真実の言葉である。

親友のおかげにより、ヒロシマ原爆被爆者の高蔵信子(たかくらあきこ)さんから、彼女の詩と絵と手紙をいただいた。高蔵さんは、十九歳の時、爆心地からわずか二百六十メートルという至近距離で被爆した。コンクリートの建物が直接の放射熱線を遮ったため、奇跡的に一命をとりとめた。外に出ると、誰も生き残っていませんでした。

「原爆を知らない若い人たちに」  
高蔵信子  
その時 昭和二十年八月六日午前八時十五分  
とてもよく晴れた朝でした  
赤ちゃんのミルクをつくっていたお母さん  
植木に水をやっていたおじいさん  
仏様にお花を献げていたおばあさん  
ごはんを食べていた坊や  
会社に出てこれから仕事をしようとしていたお父さん  
そして仕事にゆくために道を歩いていた  
たかさんの人  
みんな死んだのです(中略)  
その時死んだ人  
百人? いいえ千人? いいえ一万人?  
いいえもっともっとたくさんの人  
かぞえきれない程の人が

なんにも言えないで  
なんにも知らないで  
死んでしまったのです(中略)

私たちはいつまでも  
ケガをしながらヤケドをしながら  
生きていた人たちの声の限りさげびました  
「たすけて、たすけて」



道を歩いていて死んだ人の指が燃えました  
青い炎を出してポロポロ燃えました  
指は短くなり  
薄墨色をした液体が掌を伝って流れ  
地面に落ちました  
あの指はだれの指だったのでしょうか  
六十年余を経過した今もなお  
あの青い炎の色を思いだすと  
私は深い悲しみで  
胸が一杯になります。

「数えきれないほどの人が何も言えないで、何も知らないで死んでしまったのです」という言葉が胸に迫る。これは高蔵さんが被爆地で見つけた、燃えていた人の手の絵である。  
その手紙には、こう書かれていた。「広島原爆であたり一面は火事、通行中即死なされた

らしい遺体で体は仰向けになり、何かをつかむように手を空に向け、その指は青い炎を出して燃えていました。指も3分の1くらいに短くなり、変形して青い薄墨色をした液体が手をつたわり地面に流れていました。かつてはこの手で愛児を抱き、あるいはまた...高蔵信子。この燃えている手の絵に、あなたはどのようなことを感じるだろうか。

## 恨みを超える道はなにも

それでは、恨みや後悔を乗り越えていく道はどこにあるのだろうか。

一つは、戦争を解釈し、戦争は正義の聖戦であると肯定しつづけるなら、戦争はまたくりかえされるだろう。私たちの住む日本は、世界唯一の被爆国であるとともに、他国を攻撃し多くの人々を殺戮した国でもある。暴力は相手からの暴力の応酬をひきおこし、暴力の連鎖をつみだすだけで、真の平安をもたらすことはできない。戦争には勝者も敗者もない。何にも知らないで、何にも言えないで死んでいった人たちがいる。戦争時に、愛する人を助けられず、自分だけが生き残った人もいる。和解への道は、過去の戦争を過ちとして認め合い、未来に向けて世界が協力して平和を構築していくことである。最も大切なことは、あれこれと言いつけるのではなく、過去の事実をありのままに知り、

戦争の悲しみに学ぶことだろう。高蔵さんは深い悲しみから慈しみを感得していった。青い炎をだして燃えていた手、そのどうしようもなく悲しい手に、愛情を感じとっていった。そういう負の遺産に学ぶことが、何よりも大切ではないだろうか。

もう一つは、ダライラマ十四世の「寛容さや敵からのみ学ぶことができる」という言葉である。その底には、「怨親平等」という仏教の教えがある。「怨」というのは恨みにおもう敵をさし、「親」というのは親族のよしみな味方をさす。しかし敵も味方も長い歳月をかけてみれば、親兄弟のような存在である。敵さへも、自分の固定観念を離れてみるならば同じ人間であり、平等な存在であるとみぬいていく心である。恨みに怨みを返さない。一人ひとりが心に平和を誓うことが、やがて家族、学校、国、世界への平和につながるだろう。

憎しみは憎しみによってやむことはなく、ただ慈しみによって消え去る。争いをなくす道は、貧困や飢餓に対する手厚い保護であり、子どもたちが等しく平和教育を受けられることだろう。世界の人々が心のふれあいを感得して、同朋として信じあえることだろう。

戦争犠牲者の無念さ、悔しさ、悲しみは決して消えるものではない。だからこそ、このような悲しみが二度とくりかえされないように、「世のなか安穏なれ」と願っていききたい。

## 親鸞聖人七百五十回忌・真宗教団連合四十周年記念

# 親鸞展

## 生涯とゆかりの名宝



今に残る法宝物が多数公開される。  
誕生800年以來、38年ぶりの大展開覧となる。

親鸞聖人の肖像画「鏡御影」(国宝)、聖人が思索を深め、推敲と真宗教団連合40周年を重ねて書きあげた年を記念した「親鸞展」『教行信証(坂東本)』が3月17~5月29日(国宝)の2点は必見。で京都市美術館で開催される。その他、真宗寺院で護持されてきた法宝物

第1章「親鸞聖人や、各寺院に伝わる美の教えと生涯」、第2しい名宝も展覧される。第3章「伝来の名宝と美術」の3部構成。国宝、重文を始め、一般1,000円。